

留学・研究計画書

氏名 宮田 寛章	留学機関名 ロメ大学、文学・人文科学部、人類学・アフリカ研究学科
留学先国名 トーゴ共和国	留学期間 西暦 2012年8月～2013年7月
研究テーマ 西アフリカ都市部における宗教とメディアの関係 —「カリスマ派的」メディアのマルチモダリティ分析から	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>グローバル化の進展とともにメディアは、宗教が社会に与える影響力を、範囲と強度の両面において劇的に増大させたことは疑いない。現代のメディア社会においては、もはや宗教を教団とその信者によって構成される局所的な文化・社会的現象としてのみ扱うことは困難である。本研究は、近年世界中で興隆している、グローバル宗教としてのカリスマ派キリスト教とメディアの関係を、西アフリカ沿岸都市を事例に解き明かすものである。</p> <p>西アフリカの沿岸都市では、1990年代以降カリスマ派キリスト教が爆発的に信者数を増やしており、伝統的な社会関係の在り方に大きな変化を与えている。カリスマ派はキリスト教の三位のひとつである聖霊のはたらきを重視し、この世の善悪及び幸不幸はこの聖霊と悪霊のそれぞれのはたらきに負っていることを強調する。近年、このようなカリスマ派に特徴的な霊的イデオムを、表象形式としてストーリー構成や描写方法に流用した映画、テレビ、音楽、ウェブサイトなど多様な「カリスマ派的」メディアが当該地域で広く流布している。それは必ずしもカリスマ派信者の間に限定されるものではなく、日常的に教会に通う信者以外の人々にも人気を博しており、「ポップカルチャー」としての様相を呈している。</p> <p>先行研究の多くは主に、これらメディアが含むカリスマ派の教義や言説に関するメッセージの意味内容に焦点をあてたものが多く、人びとがどのようにメディアを経験するのかといった意味作用や、その経験が社会に与える影響については十分に明らかにされてこなかった(Meyer 2004)。本研究では、①「カリスマ派的」メディアの表象や物語が具体的な状況や場において、どのような言葉で、どのような映像・音響とともに語られ、どのように評価・受容されるかといったマルチモダルな意味作用を分析する。そのうえで②「カリスマ派的」メディアがいかなる過程を経て、カリスマ派の境界を超えて広く社会で消費され流通しているのか、及び③「カリスマ派的」メディアの消費という人びとの経験とカリスマ派教会における信者の宗教実践が相互にどのような影響を与えあっているかについて明らかにする。これにより本研究は、教団/信者を分析の枠組みとしてきた宗教社会学に新しい展開をもたらすことができる。</p> <p>メディアによって宗教は、多様な意見が対話・交渉をおこなう公共圏に参入する一方で、その内部においては親密性を過剰なまでに増大させ、「分散的で排他的な共同性」(大澤 1999)へと至る可能性をはらんでいる。このような逆説的な現象は、国際テロ、宗教対立、宗教のカルト化などの社会問題として立ち現われていると考えられる。本研究は、公共圏における宗教の動態を分析し、そこで生まれうる親密性や共同性の性質を検討することで、上記のような社会問題を緩和・解決へと導く提言をおこなうことができる。</p>	